

「歴史の旅」

「歴史の旅（History Expedition）以下、HEX」とは、インドの子どもたちが児童労働の現場を回りカメラで記録する旅です。写真のトレーニングを受けてきたボーンフリーアートスクール(The Bornfree Art School；働く子どもたちやストリートチルドレンが芸術教育を受け、社会復帰をしていく学校。バンガロール市)の子どもたちが、2006年2月から4月、カルナタカ州周全土を回り、同州政府が指摘した83種類の児童労働現場をカメラで記録しました。

この旅では、子どもたちは、最終的には南インドのカルナタカ州のみでなく近隣のタミールナドゥ州やゴア州を含め約4040kmの距離を回りました。子ども写真家15名は全部で2万5千枚の児童労働の写真を生み出すことになりました。

2月下旬よりHEXが開催されました。ここで述べる**歴史**とは、権利を奪われ早過ぎるおとな時代に足を踏み入れさせられている働く子ども、債務奴隷の子ども、路上で生きる子どもたちの「今の歴史」です。オラルでは過去2年半に渡り、15回のワークショップを通し、6000枚の児童労働の現実を子どもたちが写真に記録していきました。主には都市バンガロールで見られる子どもたちの働き生きる場面を収めてきました。この経験を通し、農村に更に広がる児童労働の現実を写真に収め、児童労働の根本の原因を理解するためにHEXを開催することになりました。

幼児婚～ガンガマちゃん

私たちはリンガヤッパカードゥ村（マンガロール地区）で、現在8歳で2ヶ月前に結婚したガンガマちゃんに出会いました。よく話を聞くとその村では11歳、12歳の女の子の多くは結婚していることが分かり、私たち全員ショックを隠し切れませんでした。ガンガマちゃんによると、彼女は北のビジャプールというボンベイに近い地区の出身で、彼女の結婚式には300人の来客があったそうです。ガンガマちゃんは結婚式の後、同村に移住し、今学校で勉強をしています。他多数ある儀式の内のその一つのように「結婚」を捉えているようでその意味は恐らく知る由もないと思われました。インドではサラという金のネックレスを付けた女性は結婚している象徴で、ガンガマちゃんも同じく付けていました。

12歳のシャルダは1年前に結婚しました。夫は22歳と10歳の年齢差があります。会った時は、彼女は井戸で他の結婚した“女の子たち”と水を汲んでいました。最初はみんな学校に行っていると事実を隠していましたが、色々話をしていくうちに学校を7年生でやめて結婚し家事洗濯をしているということが分かりました。幼児婚の禁止が法廷で定められているにも関わらず、こうした幼児婚のケースは北部カルナタカ州（発展が遅れている地域）で頻繁に見られます。同村では幼児婚についての社会意識啓発もなく人びとがそれを平然と受け止めているということに驚きました。

魚を盗る子どもたち

マンガロールという海岸沿いの町は歴史的にキリスト教の影響が強く、インドでも一番古い大聖堂が聳えています。中はミケランジェロスタイルの壁画が教会の壁を覆い、歴史を感じさせる場所です。他の地域に比べて一見教育が満遍なく行き渡っているように見える場所でしたが、港に行くと威勢の良い漁師と多くの子どもたちに出会いました。おとなが声を張り上げて

魚卸をしている横で、魚の仕入れ箱が空になるのをじっと待ち、質が悪いため売れ残った魚を一瞬にして拾い上げる子どもたちに出会いました。実際には盗み取りをしてそれらを安く路上で売っています。地べたに数える程しかない魚を広げお客に声をかけられるのを待つ少女たちばかりです。魚だけでなく、トラックから下ろされて地面に転がり落ちた氷のカケラも子どもたちが拾いそれを売っています。多くの少女たちはおよそ10歳から14歳当たりでやはりビジャプール地区から移住して来た子どもたちでした。

子どもたちによる記録

HEXでは、子どもたち全員がデジタルカメラを握り一日100枚以上の写真を撮ります。写真を収めると同時にこのHEXで最も大切なのは当事者の歴史を記録していくことです。ボーンフリーアートスクールの子どもたちはノートと鉛筆を持ちインタビューをします。一枚の記録用紙が用意されており、およそ20の質問事項があります。年齢から、親の名前、職業、将来の夢など詳細に記録していく必要があります。14名の子ども写真家のうち3分の2は読み書きが十分に出来ません。よって、今回のHEXの達成目標の一つは一人ひとりが旅の終わりには読み書きが出来るようになることです。子どもたちの多くは読み書きに対し苦手意識を持ち自信を持っていません。アントニー（14歳）は7年生の試験に合格して読み書きが出来るにも関わらず、手に入れた情報を紙面に記録することを極端に恐れています。読み書きが出来る子どもとそうでない子どもたちに差が出始めたため、読み書きが出来る子がそうでない子のアシスタントをすることにしました。そうして、子どもたちが他の子どもたちを助ける必要性を強調しています。更に、紙面に埋めることをしない限りカメラは手に入らないことも条件にしました。そうすることで、殆どの子どもたちは人の助けを借りて毎日深夜まで座って記録用紙を埋めていくようになりました。最初はおとなや他の友達に頼んで書いていたナガラジやアナンは10日目あたりから自分で書くようになり進歩が見られるようになっていきます。今回出来の良い、歴史的に意味のある写真200枚を収めた本を作成する予定で、今後この記録用紙が重要な役割を果たしていきます。

HEXは現在の子どもたちの歴史だけではなく、過去の歴史を辿る2つ目の意味があります。それは、ボーンフリーアートスクールの子どもたちの多くが村からバンガロールに辿り着き働く子ども、ストリートチルドレンになって行った経緯があります。つまり、彼らの生まれた村とその村で働いていた経験をHEXを通して辿っていくことです。ラジュ（14歳）は最初スリランガパトナという町で7歳からレストランで仕事をしていました。自分の親に一度も会ったことがない孤児ですがそのバックグラウンドを感じさせない垢抜けた性格の持ち主です。学校に行ったことがなく、レストランのオーナーの元で育ちました。私たちがスリランガパトナに行った時にカーベリー川の美しい場所で泳ごうということになり行ったところ、ラジュが「ここで毎日僕はレストランから水を汲みに来ていたよ。」とポツンと言いました。そこで初めて、彼の生い立ちを知ることになりました。次の日、彼の働いていたレストランに行き、彼を叩いていたオーナーに会いました。ラジュを見ても懐かしがるということもなく、いささか私たちのグループに疑念を持った様子でした。

ストリートチルドレンとして数年もバンガロールで暮らしていたキラン（14歳）は、マイソールで、「僕はただ乗りして電車でここに来て、ソリューションを吸ってマンドゥヤまで歩いてそれからまた電車でバンガロールに帰ったんだ」と突然言いました。プラシャン（12歳）はレンガ工場に行ったときに、「僕もレンガ工場に2ヶ月働いて一日10ルピー（26円）もらっていたんだ。」と言いました。これから分かるように、子どもたちは行くところで見ると様々な場

面に自分の過去の経験を思い起こしています。そういった意味で子ども写真家自身の過去の歴史を辿っていく意味も HEX で出てきました。

警察で尋問された子どもたち～中部カルナタカ州

HEX では、旅の途中に、何らかの危険が子どもたちの身に及ぶこともあるかもしれないと注意しながら行動していましたが、ある日、決定的な事件が子どもたちに起きました。

旅の後半、カルナタカ州の全ての地区を訪れるために、責任感があり独立して行動ができる4名の生徒と教師1人が、チームと別れて3地区を回り、あとでチームと合流することになりました。そこで、彼らはフブリ地区（カルナタカ州中部）へ向かって出発しました。

ジャイラム（16歳）は、フブリで物乞いをしていた5歳の女の子に出会いました。彼女と友達になったジャイラムは彼女にお菓子を買ってあげたところ、おとなたちが彼を囲み始め、「お前はこの子に何をするつもりだ?!」と問い詰めてきました。ジャイラムは、おとなたちに、その女の子をだまして人身売買をするのではないかと、という疑いをかけられたのです。そこに一緒に行動していたラジャ（14歳）も飛んで帰ってきて、二人は HEX のことや学校のことなどを説明しました。

野次馬状態となった周囲はたちまち100人にも膨れ上がり、ジェイラムとラジャたちはがっかりと囲まれ尋問されたのです。そして突然、おとな何人かが彼らの手をぐいと掴み、手を後ろに回し身動きが出来ないようにしたので、一気に緊張は高まり、そこに警察官がやって来ました。しかし警察は、子どもたちを助けるどころか疑いの目を向け、警察署に連行したのです!

警察官は「写真を撮りたいのなら警察から許可を取れ」と怒鳴りました。そこで、バンガロール市警察所長からのプロジェクトに関する合意書（プロジェクトについての理解と、参加する子どもの保護の協力を取り付けた書類）を見せましたが、警察官はそれには全く目を触れようとしません。警察署では、彼らが HEX のことやボーンフリーアートスクールのこと、これまで撮ってきた写真のことをどんなに説明しても、警察官は耳を傾ける様子もなく、それどころか、子どもたちが持っていたデジタルカメラを取り上げてしまいました。しばらくして、シニワース（17歳）、アルン（15歳）と教師のラジュ先生も飛んで駆けつけました。「僕たちには写真を撮る自由があるし、それは表現の権利だから、権利に関して誰からの許可も必要ではないんだ。」とジャイラムは警察に主張しました。

一方、別行動していたチームメンバーにも、この知らせを聞いて緊張が走りました。そして、ジョン・デバラジ（ボーンフリーアートスクールのダイレクター）が警察署長に電話して説明をし、やっとその場は収集されました。この事件で他のチームとの合流が大幅に遅れ、彼らが集合地についたのは夜中の1時半を回っていた頃でした。

次の日の朝食、ジェイラムたちは勇敢なヒーローとして子どもたちに迎えられました。彼らは、警察官や群集から浴びた屈辱など前日の出来事について、他の子どもたちと話し合いました。ジャイラムは「僕はかつて盗みをして刑務所に入り、檻の中でじっと座っていた。でも、昨日の僕は子どもたちの権利のために闘うために警察署にいた。」と言った途端、子どもたちからは大歓声が上がりました。アルン（15歳）は「警察署にいた時、自分たち子どもの権利は守られていないと感じた。」と述べました。ジョンはそれに対して「自分の権利を知らなければ、どのようにこのような状況に立ち向かってよいのか分からない。だから、毎朝子どもの権利条項を読み上げているクラスで、みんなはきちんとそれを理解し、自分のものにしなければならぬね。」と答えました。

実はジャイラムは、ジェームズ・ボンドも顔負けのインド版子どもボンドでした。彼が路上で暮らしていたとき、ある工場で弾丸が入った袋 20 袋を盗みました。そして警察に追われ、貯水タンクに身を隠していましたが、1 時間くらいしてそうっと顔を外に出した途端、ぐいと警察の手に引きずられ逮捕されてしまいました。13 歳で刑務所に入りました。彼は、非常に愉快でいつも人を笑わせる性格で、この話になると「警察は檻の向こう側に、僕は檻のこっち側で檻の数を数える“仕事”をしていた」と大きな声で説明します。結局、ジャイラムの母親が迎えに来て、母親をこれ以上悲しませてはいけないことに気づき、盗みをやめる決心をして、リハビリテーションセンターで勉強することになりました。

そして、そこで7年生の試験に合格し、現在はボーンフリースクールで最も才能のあるアーティストとして活躍しています。彼の描く絵や彫刻は、働く子どもたち、ストリートチルドレンの笑いや悲しみについてです。子どもたちの間でも大人気のジャイラムは、今回の件で一層他の子どもたちから尊敬を得たに違いありません。

執筆 中山実生

(無断で本文を使用・転載することを禁じます)